

| | |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title | W・ ビヴァリチ著 英国価格及び賃銀史 : Beveridge, Sir William: Price and wages in England from the twelfth to nineteenth century. Vol. I. Price table: Merchantile era. With the collaboration of L. Liepmann, F. J. Nicholas, M. E. Rayner, M. Wrettes-Smith and others. pp. lx, |
| Sub Title | |
| Author | 三邊, 清一郎 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1940 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.4 (1940. 4) ,p.597(137)- 606(146) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19400401-0137 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400401-0137 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

園の如くに耕作せられ、毫も其れ以上に収益を増加せしむるの力なきに至る迄は、這般の原因よりして何等の困難も生ず可きものではないと考へてゐた。彼れは未だマルサスの如く是れを以つて刻薄なる世界の嚴正なる實在と觀ることがなかつた。マルサスはウォレスの考察の或るものに負ふ所顯著なるものであると主張せられた。洵に是れ等のものが彼れに示唆を與へたことは疑ひなき所ではあるが、而も兩者の間には産業革命の進展によつて穿たれた深き溝坑の存することが認められなければならぬ。

W・ビヴァリヂ著「英國價格及び賃銀史」

Beveridge, Sir William:—Price and wages in England from the twelfth to nineteenth century.
Vol. I. Price table: Merchantile era. With the collaboration of L. Liepmann, F. J. Nicholas,
M. E. Rayner, M. Wretes-Smith and others. pp. lx, 756. London, New York, Toronto, 1939.

三邊清一郎

本書は國際價格史科學委員會 International Committee on Price History の計畫に従つて遂次刊行せられる叢書の一である。この委員會は本書の著者W・ビヴァリヂの創意により一九三〇年ロックフェラー財團の財政的援助を得て創立されたものであつて、その計畫に従ひ既にE・ハミルトンの西班牙價格史研究を初め、佛蘭西、獨逸、墺太利、米國の價格史が公にされて居る。註本書は第一卷には一五五〇年より一八三〇年に至る著者の所謂「商業時代」の價格を、第二卷は一一五五年から一五五〇年に至る「莊園時代」を取扱ひ、第三卷には全期間に互つて勞働及び小麥の價格を通觀し、第四卷ではこの研究の成果を論評し、そして可能ならば國際價格史研究の全事業に對する結辭を述べたい希望を漏して居る。今回出版されたのはその第一卷「商業時代」篇である。

惟ふに今日ほど資本主義社會機構に於ける價格の役割を明瞭にさせて居る時代はあるまい。均衡理論の教ふると

こゝに從ひ、需要供給の原理により均衡價格を成立させるものが競争の機構であるとするれば、競争を排除する統制價格が、また物價停止令による釘付價格が、物資の需給適合を妨げる結果を惹起するは蓋し止むを得ないところであらう。また拂底の原則に從つて、「消費を拂底する財の供給に一致させる」ことが價格形成の任務であるならば、低物價を目標とする公定價格はこの任務を怠たれるものであり、闇相場こそこの原則が示す正常價格であると言はなければならぬ。或る意味に於いて經濟の循環は、價格を繞つて行はれると言へる。有ゆる社會現象は悉く價格に反映する。人口がそうである。貴金屬の供給がそうである。産業組織、農業方法、商業及び運輸、消費及び技術等の變化發達にして凡そ價格に反映しないものはない。その騰落に隨つて社會の各階級各層は或は榮え或は衰退する。定に價格は有ゆる社會現象の變遷推移を映出する鏡であり、客觀的記録である。富に關し、生活程度に關し、各時代、各地方の比較がこの研究によつて可能ならしめられる。そしてそこに價格理論の意義があり、價格史の意味があり、また本書の重要性が存するのである。

吾々は既に幾つかの英國價格史をもつて居る。早いものには

W・フリートウッド、「クロニコン・ペンキオメタ」 Fleetwood, William: Chronicon Preciosum, or an account of English gold and silver money; the price of corn and other commodities; and of stipends, salaries, wages, jointures, portions, day-labour, etc., in England, for six hundred years last past. Lond., 1707, 2. ed. 1745.

F・M・イーデン「貧民史」 Eden, Frederic Morton: the State of the poor: or an history of the labouring classes in England, from the conquest to the present period... Lond. 1797.

D・マッソン「商業、製造業、漁業及び海運編年史」 Annals of commerce, manufactures, fisheries, and navigation. Lond., 1805, (Vol. IV. Appendix, No. iii. A chronological table of the prices of corn and several other necessary articles, and also of salaries, wages, marriage portions, ransoms of captives, etc. in England and Scotland...)

があり、後れては

T・トック、「價格史」 Tooke, Thomas and Newmarch, William: A History of prices, and of the state of the circulation... Lond., 1838-57.

J・E・T・ロヂャース、「英國農業及び價格史」 Rogers, James E. Thorold: A History of agriculture and prices in England from the year after the Oxford parliament (1259) to the commencement of the continental war (1793). Compiled entirely from original and contemporaneous records. Oxford, 1846-1902.

がある。

右のうちトックの「價格史」はジェヴォンスが「比類なき好著」であると批評し、ロヂャースのそれは本書の著者が「極めて重要な先驅的著書」と稱揚するものである (Jevons, W. S. Investigation in currency and finance. 1884, p. 119)。それ等はそれ々その時代に於いて優れたものであつた。けれども各國の經濟生活が世界的靱帯によつて結ばれ、價格構成も世界市場の影響を免れ得ない今日、その價格の研究も國際的な立場からなされることが必要であるは言ふまでもない。國際價格史料學委員會はこの趣旨に基いて設立され、共同の問題を論議し、用語、製表、方法に就いて共通の形式を決定したといふ。各國とも價格比較の基礎として一七二一—四五年の平均を採用するが如きはその一例であつて (p. 683)、本

書が新しい價格史として舊著に對してもつ意義、一つはこゝに存する。

本書に集成さるゝ價格及び貨銀は同時代の文書すなはちウルクンデに記録された數字を基礎として計算された平均である。これはロヂャースの方法に従つたものであるが、それよりも時代に於いて古く、資料に於いて豊富である。ロヂャースの場合は、資料に不足するところもあつた爲めその取扱に遺憾な點も尠くなく、資料が地方的に偏つて居るために「その年平均は一般價格状態を表示しない。」労働平均は一般的意義をもつといふよりも寧ろ地方的意義しかもたないものと解さるべきである。羊毛の價格に至つては不完全なること甚だしく、その平均は實用的價值なきまで人を誤解に導くものであると評された(Lutz, Harley L.: *Inaccuracies in Roze's History of prices*). 而して何れの地方をとつてもその價格の系列は連續性を缺くといふのが、その第二の批評である(p. 358)。本書では同一場所に於ける同種取引の連續的記録を収録して孤立的事實を採らなかつた。著者は本書は最初ロヂャースの價格系列を繼續補足するを目的として出發したが、出來上つたものはロヂャースの訂正版でないことを言つて居る(p. vii)。元來價格史の研究には使用資料が一貫して居ることが望ましい。蓋し繼ぎはぎの材料による價格系列は、當時の原資料から取材されたものであるにしても、記載された貨物の品質、尺度及び賣買條件等著者の所謂内的要素の相違が考へられ、従つて純粹に需要供給の變化に基く價格の運動を反映しないからである。一貫する資料を用ふればある程度この不正確から免れられる。かくて本書では「同一目的のために同一組の文書に記録された長い系列の價格のみを用ひ、」幾多の個人の勘定書や商業書類の利用を割愛したといふ(p. xii)。資料の連續性を本書が在來の同種著述に對してもつ最も著しい特徴であり貢獻である。

前述の如く本書に収録さるゝものは、當代の文書に取材された價格及び貨銀の平均である。けれどもその場合價格若しくは貨銀といふのは等しく同時代の貨幣の平價に従つた價格である。換言すればそこに記されて居る志はその時代の人達がそう考へた志であつて、地金等價に換算された價格なり貨銀でない。成程英國では貨幣の單位はノーマン征服時代以來一磅 \parallel 二十志、一志 \parallel 十二片と確定して居り、一志が六片であつたり八片であつたりしたのはアングロサクソンの既往に遡らなければならない。しかしとは言へ、他の諸國に於けると同じく、志に含まるゝ純銀量には數々變化があり、且つ十九世紀後半には通貨の基礎が銀から金に變つて居るのである。だから著者のこの價格の取扱に關して異論のあるべきことは容易に想像され得る。著者もこの批評を豫期してヴィコント・ド・アヴネルがその「佛蘭西價格史」のなかで「現在の單位に換算されない價格は灯がついてない提灯だ」といつた言葉を引つて居る(Vicomte G. d' Avenel: *Histoire économique de propriété, des salaires, des denrées et de tous les prix au général depuis l'an 1200 jusqu' en l'an 1800*, 4^e éd. Tome 1. 1914. Introduction, p. XVI.)。けれども著者は、經濟構造の變化を示す異なる時期に於ける異なる貨物または勞務の價値の比較、といふ價格史の主要目的はこの換算なくして達せられる。經濟史研究上最も多くの場合に最も重要なのは、當時の計算の貨幣によつて示される價格である。これ等價格に對する地金等價の重要性は、價格を貴金屬の供給または通貨政策との關係に於いて考察するといふ特殊の目的に限られるといふ見解を採つた。そしてこの見解の根底には、地金等價に換算された「これ等數字は價格と考へらるべきものではなくして、價格の銀若しくは金等價と見るべきものである。貨幣經濟に在つては、財貨は純銀なり純金の幾グレンと交換して賣買せられるのでなくて、貨幣と引換へに賣買されるのである。貨幣は、金銀鑄貨である場合でさへも、鑄貨に含まれる金銀以上であり以下である。金銀等價を貨幣だと説明するのは貨幣の本質を無視し、貨幣の使用による交換と物々交換とを混同するものである」といふ思想が横はつて居るの

であるといふ(p. xlix)。しかしこの著者の所見に對しては多少異論なきを得ない。何故なれば、著者は貨幣は交換の媒介物として鑄貨に含まれた地金以上であり以下であり得ると言つて居るけれども、地金と分離した貨幣が完全な流通手段としての機能を果たすのは、それが支障なき商品の交換を保証するからである。だからかゝる貨幣が支障なき商品の交換を保証せず、質量を吟味しつゝ流通の用に供せられるとすれば、それは完全に流通手段の機能を果して居るものとは言はれない。かくて過去に於ける幣制紊亂の際には價格の騰貴を伴ふのが常態であつた。然るにこの價格騰貴は貨幣の側に於ける事情を含み、純粹な貨物の需給状態の變化を反映するものでない。それは寧ろ地金等價の變動のうちに表示される。だから價格史の研究に對し貨幣史、造幣史の重要さが考へられるのであるが、しかしこゝではそれに觸れないで、それが取扱ふ貨幣制度の不完全な長い期間に對して、著者とは反對に地金等價に換算された數字が、却つて經濟史研究上最も多くの場合に最も重要であることを指摘して置きたい。本書では後の卷に鑄貨に關する若干の説明と、著者の所謂特殊の目的のために比較的重要品種及び十年毎の銀等價、すなはち一定量の小麦、羊毛、木炭その他と交換された鑄貨の形態に於ける純銀量目を示す數字の集成が約束され、兎に角そこで上述の要求が大部分充たされることになつて居る。

今回公にされた第一卷は英國の商業資本が漸く活潑な活動に入らうとする一五五〇年から一八三〇年に至る著者の所謂「商業時代」"Mercantile Era"を對象とする。だから第二卷に於いて十三世紀に遡り莊園時代を取扱はうとする順序は、時代的に逆であると言はなければならない。これに就いては著者は、爾餘の諸國には十四世紀を遡る資料の保存せられるもの尠く、殊に英國に於ける莊園時代の教會文書に匹敵するものがなく、且つその存在するものも連続性に乏しいといふ理由から、これ等諸國のそれと一致させるため國際委員會の懲慚に従つて、既に爲さ

れた英國莊園時代の研究を一時お庫にしたのだと言つて居る。これは恐らく英國が大陸諸國と異り島國として永く平和を享受し得た特殊事情に由るものであつて、この國の經濟史學界のために幸としなければならぬ。

本篇に利用せられる資料は「商業時代」の

Winchester College (1393-1817).

Chelsat Hospital (1702-1810).

Eton College (1444-1830).

Lord Steward's Department (1556-1830).

Westminster (School and Abbey. 1574-1830).

Lord Chamberlain's Department (1556-1830).

Charterhouse (1644-1830).

Royal Works (1552-1814).

Sandwich (St. Bartholomew's Hospital 1712-1828).

Navy Victualling (1683-1814).

Greenwich Hospital (1712-1828).

Naval Stores (1566-1813).

の諸施設に於ける財務擔當者の記録する Accountant Rolls, Ledgers, Account Books, Audit Books, Rentals, Corn Books, Diet Books 等である。著者はこれ等の資料から若干批評を加へた價格を採集して小麦外一四九種の貨物に對する年々の平均價格を與へる主表を作成した。そして各主表毎にその理解に必要な關係施設及び使用資料の解説並びに各價格系列に對する註釋を加へ、第二次表として一七二一—四五年の平均を一〇〇とする各貨物價格指數を附屬せしめた。この第二次表に採用された基準は、この時代の中期に近い價格變動の少い時期を選んだものであつて、齊しく國際委員會の採るところであり、これによつて各國に於ける各種貨物の價格の運動が國際的に比較されるのである。

著者はまた本篇に長文の總序を附し、價格史編纂の方法及び資料取扱上の注意等種々教ふところが多い。例へ

ば價格史が資料とするものは實用文書であるから、それには殆んど常用の尺度や取引條件が書いてない。けれども同一組の文書に年々歳々同一文句で記載してある取引は、特に變更が明記してない限り惰性により、一般に品質・尺度、條件を同じうするものと考へていい。しかし或る年に特に註記が施してあるならば、それは指標としてよりも寧ろ例外または將來の變更の豫告と考へねばならぬ(p. xxviii)と言つて居るが如きその一例である。同様のことは野村兼太郎博士もその農村文書の取扱に關して常に注意を與へて居られるところであるが、吾々は更に最終卷に於いて述べられるといふ、前記諸資料から生れる様々な結果に就いてこの價格史の權威の論評に多くの期待を懸けて居るのである。(價格英貨31s. 6d.)

註 國際價格史料學委員會からは今日まで英國以外の國に於いて次の諸書が公にせられて居る。

奧地利

Pribram, Alfred Francis: Materialien zur Geschichte der Preis und Löhne in Österreich. Unter Mitarb. von Rudolf Geyer u. Franz Koran hrsg. Bd. I. Wien, 1938.

佛蘭西

Hauser, Henri: Recherches et documents sur l'histoire des prix en France de 1500 à 1800. Pariss, 1936.

獨逸

Elsas, M. J.: Umriss einer Geschichte des Preise und Löhne in Deutschland vom ausgehenden Mittelalter bis zum Beginn des neunzehnten Jahrhunderts. Bd. I. Leiden, 1936 (E 37-167.)

米國

Bezanson, Anne (u. a.): Prices in Colonial Pennsylvania. 1935. (Wharton School of Finance and Commerce, Industrial Research Study 26.)

Bezanson, Anne, R. D. Gray and M. Hussey: Wholesale prices in Philadelphia, 1784-1861. Phil. 1936. (Ibid Studies 29.) Pt 2. 2. Series of relative monthly prices. Phil. 1937. (Ibid Studies 30.)

Warren, G. F., F. A. Pearson and H. M. Stoker: Wholesale prices for 213 years, 1720-1932. N. Y., 1932-33. (Cornell University Agricultural Experiment Station, Memoir 142.) I. Wholesale prices in the United States for 135 years, 1797 to 1932, by G. F. Warren and F. A. Pearson. II. Wholesale prices at New York City, 1720 to 1800, by H. M. Stoker.

Cole, Arthur Harrison: Wholesale commodity prices in the United States, 1700-1861. Vol. 1-2. Cambridge, Mass., 1938.

西班牙

Hamilton, Earl J.: American Treasure and the Price Revolution in Spain, 1501-1650. Camb., Mass., 1934. (Harvard Economic Studies 43.)

Hamilton, Earl J.: Money, Prices and Wages in Valenciai Aragon and Navarre, 1351-1500. Camb., Mass., 1936. (Ibid Studies 51.)

波蘭

Polish Annals of Social and Economic History, ed. by Fr. Bujak. Supplementary memoranda. 〇社

にされて居る。

和蘭

一九三九年中は二巻出版される豫定だと傳へられたが、尠くも昨年中には刊行を見て居ないやうである。

前號(第三十四卷) 目次

第三十四卷

目次

●少数民族問題

——ヨーロッパにおける

少数民族としてのドイツ人問題——

加田 哲二

●青果市場の一研究

——商業調査報告の一齣——

岩田 侃

●貯蓄投資の均等説について

——ケインズ一般的論を中心として——

千種 義人

●技術の進歩と労働者心理學の問題

問題

藤林 敬三

●西原雄次郎著『藤山雷太傳』

高橋誠一郎

●一冊定價金五拾錢
●半年分金貳圓九拾錢
●一年分金五圓四拾錢
●郵税金壹錢五厘
●郵税共

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
●營業に關する用件は發賣元宛
●原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和十五年三月廿五日印刷納本
昭和十五年四月一日發行 每月一回一日發行

三田學會雜誌
第三十四卷第四號
編輯者 江田 範 保
發行所 東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内
印刷者 金子 鐵 五郎
印刷所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
金子 活版所

發賣元 東京市芝區三田二丁目一番地
丸善株式會社三田出張所

●尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す
發行所 東京芝三田
慶應義塾内 理財學會

振替 慶應義塾 芝區三田二ノ二
口座 慶應義塾 東京一八二〇四番